



## 素粒子運動と物理存在の構築への考察

令和6年10月27日

黒田 毅

自然界を考察するとき、半永久運動が存在し、エネルギーの拡大において現実が与えられるものでない。それは固定数におけるエネルギー量の変化が、半永久運動と共に、すべての現実の変化を形成していると考えられるのである。

これらすべての現実はエネルギー保存の法則において、その均等化を働きとすることは正しいと考える。

またすべての素粒子や原子運動の形成は、半永久性を有し、すべての自然界現実において、その運動性を永続するものである。これらすべての運動性の永続は、変化とともに、そのバランスの形成を与え、現実を維持する。

バランスへの回帰という中心点は、すべての物理運動における共有性である。これらはすべての物理現実が自己を回帰する中心点の存在を提案するものである。

これらはビックバンが、その中心からの拡大であり、ゼロという定義を提案するならば、それら中心点からの拡大が中心点における限界性を与え、エネルギー量の形成が、固定数を与えると定義するものである。

また中心点への回帰運動と、その力形成における限界点の構築は、引力場の形成と張力の限界点の形成において、すべての物理的現実の許容性と現実を行うと定義できるのである。

これらは空間の形成への考察も可能とするものである。

またすべての物理現実がエネルギー運動であるならば、質量の形成などや力の形成とともに、すべては、運動性における物理現実の構築であると定義できるものである。

これらは視覚と触覚における現実の認識は身体作用性における現実判断であり、存在性への理解という物理学の論点における考察は、完全に相違するものであると定義できるのである。



これらすべての素粒子運動や運動性は、中心への回帰運動であると考えられることは可能であり、その中心が始原の宇宙存在であると仮定することができるのである。

これらはエネルギーの拡大という宇宙の創造が、空間の形成とともに、中心点からの拡大とその最大の許容性への到達にける現実の構築を有すると考えることは可能なのである。

これらが現実の許容性における存在性の構築であり、中心への回帰という法則は、エネルギー保存の法則とともに、すべての現実の形成を与えると考えられることはできるのである。

これは、中心点はゼロであるという仮説は可能である。そしてそのバランスの崩壊が、ビックバンであると考えられることは可能なのである。

これが真実であるならば、そのゼロバランスの崩壊は、歪みであり、その歪みが、すべての物理運動を形成するという真実を仮説できるのである。

この中心点の存在と回帰運動は、そのすべての現実を数値化し、数学の法則において説明と説明が可能であると判断するものである。

またビックバンにおけるエネルギー量の存在は普遍であり、その数値化におけるすべての物理現実の形成の説明は可能であると考えられる。

これはビックバンにおけるエネルギーの放出は一定数のエネルギーであり、そのエネルギー量は普遍であると考えられる。そしてすべての変化はエネルギー保存の法則において存在すると考えるものである。

これは始原の存在性が一定数のエネルギーへ転換することにおいて、その始原の存在性への考察を提起できるのである。これがビックバンへの説明とすることは可能と考える。

これらはゼロの崩壊と宇宙の誕生であるという仮説は存在するのである。そしてゼロへの回帰がすべての運動性の共有性であるという定義は可能であり、光の速度形成とその一定性への理解を有することができるのである。これらは光という現実が、初期宇宙における大きな凝固性における存在の誕生を有することは仮定でき、その光速度の形成と  $m=E/c^2$  という定式において、現実への理解を求めることは可能なのである。

また数学における定式の存在は、10進法に限定しない現実がその全ての存在を許容されるという理解を全ての数学的な定式において与えられると考えることは可能である。これ



が、数学が神の言葉であるという定義である。これは存在する全ての数学的法則がその物理存在を可能とするという仮説である。これらがマイクロ物理学とそれにおいて構築されるマクロ物理学における存在の可能性であると考えすることは可能なのである。これは、数学において存在するすべての定説はその物理運動において存在を可能とするという仮説を提起するものである。

また空間の形成と維持における考察は、空間の飽和におけるその張力のバランスを要求すると考える。これらが一定数のエネルギーにおける宇宙の拡大と形成を与えるとき、エネルギー量を計算することで、空間の大きさを予測できるものである。

これらは存在と空間への考察を再度提案するものである。物理存在は空間の形成において自己を有するものである。それらがバランスを形成し自己の維持を行うことは真実なのである。あと時間という変化の永続性は、生命という現実とともに世界を与えるものである。

空間は飽和において、存在を可能とするという仮説は、宇宙の始まりから、空間の形成におけるすべての現実への判断と考察を可能とするものである。その飽和性への理解は、空間の維持と存在への考察を可能とするものである。

これは飽和性の存在が空間を可能とするという仮説であり、その飽和力のバランスの維持は物理現実の維持変化であり、これらは歪みという現実がその変化の形成の永続を与えるという仮説を可能とするものである。

$m=E/c^2$  という定説における  $c^2$  が時間であるならば、特殊相対論における時間と光の関係を解明することができるのである。